

せんそうのお話をきく会 - ご報告 -

毎夏の中恒例イベント、戦争体験のお話を聞く会
今年は7/24 上宿公民館で行い、大人子ども28人の参加がありました



お話しくださったのは、御代田町在住の菅野瑠美子さん (79 歳)

菅野さんは小学校1年生の時に東京都北区で東京大空襲を経験し、その後宮崎に疎開されました。長年小学校の読みきかせボランティアとして、絵本を通じ、子どもたちに戦争や原爆のことを伝えていらっしゃいます。

今回もまず始めに「戦火の中の子どもたち」(岩崎ちひろ)を読んでくださいました。参加者の気持ち静かに戦争に向かったところで、自身のご経験を「私の戦争体験」と題して語ってくださいました。お話の中から、特に印象に残った、菅野さんの「忘れられないこと」を紹介させていただきます。

空襲

東京で…毎晩服を着たまま防空頭巾を枕元に置き、サイレンが鳴ると防空壕へ避難の毎日でした。B29も焼夷弾も目に焼き付いています。

宮崎でも…空襲はないと思って疎開した宮崎でしたが、基地が近かったため毎日のようにアメリカの飛行機が桜の木すれすれに飛んできて機銃掃射をしました。道に伏せて、人も馬も牛も死にました。病気の弟と母は防空壕に入れず家の押し入れの中で過ごしていました。空襲が終わると、姉に生きているかどうか確認してくるように言われ、「おかあさん」との呼びかけた時、声が返ってくると安心しました。

参加者の声

- 恐ろしさ、ひもじさが伝わり胸がいっぱい、平和を身にしみて感じました。息子にも聞かせたいです。(40代女性)
- 祖父母から戦争の話を聞くことができなかったのが、生の体験を聞くことができ貴重な機会でした。(30代女性)
- 介護の仕事をしていて戦争の話をたくさん聞いてきました。自分は心にきているけれど、私の子どもへはどう伝えたらよいのか、ずっと考えています。(30代女性)

いじめ

40分歩いて通った村の小学校で、疎開してきた子供に対するいじめもあり毎日ただ黙って耐えました。だんだん口を利かない子供になっていきました。小学校2年生で8歳違いの妹を背負い、子どもの本がなかったので「戦争と平和」や「罪と罰」など兄の本を片っ端から読んでいました。その後高校を卒業するまでずっと本だけ読んでいる無口な子供でした。

おにぎり

終戦を迎え、空襲は無くなったけれど食べるものがなく、ふすま、かぼちゃの葉の雑炊(まずい)、さつま芋のつる(おいしい)、なんでも食べました。母の着物を持って農家にお米を譲って貰いに行った時のこと、その子供が食べていた真っ白な大きなおにぎりから、見ちゃいけないといわれても目が離せませんでした。私にもおにぎりを作ってくれた、その味が今も忘れられません。

振り返って…

今思い起こしてみると、あの時代小学校1年生の子供を遠くに手放さなければならなかった母親、空襲が怖い一心で東京から逃げて行った子供、やはり大変な、異常な時代だったと思います。

終戦から70年経って日本は平和を保っています。でも、世界中のどこかで今も戦争で傷ついている子供が沢山いることを忘れてはならないと思います。

ーもっと子どもたちにー

このイベントはあしたねメンバー全員が毎年楽しみに準備しています。毎回感じるのですが、会って直接何うお話は、胸の深いところが届きます。内容がよくわからなくても、苦しみ、おそろしさ、安堵感…話手の言葉だけでなく、表情や声色から伝わる感じがたくさんあります。戦争を知らない大人はもちろん、子どもたちにもっともっと聞いてほしい。それが平和につながると思います。(さ)

